第49回教育美術・佐武賞

つくり出す喜びを味わうために
地域性を生かしながら試行錯誤できる題材の開発と手立ての工夫

津端 朝宏（つばた ともひろ） 新潟県長岡市立大島小学校 教諭

〈概　要〉

図画工作科の目標にある「つくり出す喜びを味わうようにする」ために、地域性を生かしながら試行錯誤できる題材を開発し、実践した手立ての成果と課題について報告する。

今回実践研究を行った5年生の子どもたちは、図画工作科の授業を楽しみにしている。40名中39名が工作を好きであるとアンケートに回答した。その理由として、（つくるのが楽しいから）（自由につくれるから）と記述している。このことから、子どもたちは題材を関わり感じ取ったことを、形として表せることで喜びを感じている。しかし、一旦形として表すことで満足し、つくり出す喜びを味わうまでには至らない。

原因の1つとして、よりよい表現を追求しようとする意欲を高めるような題材が不足していると考えた。このことを解決するために、学習指導要領では「高学年の児童は、自分なりに納得いく表現や鑑賞の活動ができたり、作品を完成させたりしたときなどに充実感を感じる傾向が強くなってくる」と記されている。※1そこで、学区で打ち上がる長岡花火を基に自分だけの長岡花火を立体的につくる題材を開発した。このことにより、自分だけの長岡花火の特徴を表そうと意欲的に取り組む子どもたちの姿が期待できる。

原因のもう1つとして、よりよい表現を追求する活動が不足していると考えた。このことを解決するために、平成20年度の答申において「芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する活動が重要であり、このような活動を各教科等において行うことが不可欠である」と記されている。※2自分一人でつくり進めていくだけでなく、工夫・改善できるような題材や手立てが必要になってくる。そこで、光り方を繰り返し試しながら立体的な形に表せる素材にした。このことにより、よりよい表現を追求し、つくり出す喜びを味わう子どもたちの姿が期待できる。

第49回教育美術・佐武賞

〈目　次〉

1テーマ設定の理由

2研究内容
（1）地域性を生かしながら試行錯誤できる題材
（2）本題材における手立て
（ア）導入段階での作例を基に表現の可能性について考える話し合い
（イ）自分の長岡花火の光り方を確かめるためブラックライトに当てる場の設定
（ウ）子どもの表現をよりよくするための教師の言葉がけ・問いかけ
（エ）長岡花火のよさや工夫について友だちと互いに鑑賞する場の設定
（オ）完成した長岡花火を紹介する活動
（3）題材のねらい
（4）評価規準
（5）学習指導要領との関連

3研究の実際
（1）抽出児のA児について
（2）作例を基に表現の可能性について話し合い、イメージを構想する
（3）光り方を繰り返し試しながらつくり進める
（4）長岡花火のよさや工夫について友だちと互いに鑑賞する
①友だちのよさを見つける鑑賞
②友だちの意見を基に、自分の長岡花火のよさを考える
（5）家族にパンフレットをつくり紹介する
（6）全校に長岡花火を紹介する
（7）地域にある美術館へ展示する

4成果と課題
（1）成果
（ア）導入段階での作例を基に表現の可能性について考える話し合いは有効
（イ）長岡花火の光り方を確かめる場を活用するよさ
（ウ）子どもの表現をよりよくするための教師の言葉がけ・問いかけの重要性
（エ）友だちと互いに鑑賞する場の設定の有効性
（オ）完成した長岡花火を紹介する活動によるつくり出す喜びの形成
（2）課題
（ア）事前に試す大切さ
（イ）よりよい表現にしようとつくり進める意欲を高める鑑賞の模索
（ウ）新たな題材の開発

1　テーマ設定の理由

5年生の子どもたちの授業の様子から次の2つが明らかになった。1つ目として、一旦形として表れることで満足し、よりよい表現にしようとつくり変えたり新たなよさを見いだしたりすることに弱さが見られた。2つ目として、互いの作品を鑑賞し合い、互いのよさやアドバイスを交流し合うことにも課題が見られた。形として表れることで満足するだけで、つくり出す喜びを味わえずにいるこれまでの授業の弱さであった。

そこで本研究では、つくり出す喜びを味わえる題材開発を試みた。そのための条件として、①子どもの興味・関心が高く共通のイメージを持つことのできる題材であること、②繰り返し試しながら形に表せること、に着目して題材の開発を試みた。このように、子どもたちの興味・関心が高く繰り返し試すことが可能な素材を使って、光り方を繰り返し試しながら自分なりの長岡花火をつくり進めていく。そして、完成した長岡花火を写真に撮ってパンフレットをつくり家族に紹介したり全校に紹介したりする。更に、地域にある美術館に展示するなど、進んで自分たちの長岡花火を紹介することによって、つくり出す喜びを味わうことができると考え、本テーマを設定した。

写真1　平成25年の花火大会

2　研究内容

(1) 地域性を生かしながら試行錯誤できる題材

本題材では、「自分だけの長岡花火」をつくる。長岡花火は、毎年8月2・3日の2日間行われる日本を代表する花火大会である。2日間で合計2万発もの花火が日本一の大河・信濃川を舞台に打ち上げられる。名物花火として、正三尺玉やナイアガラ、天地人、そして復興祈念花火のフェニックスなどがあり、平成25年は2日間で96万人もの観客がこの花火大会を見に訪れている。また、大林宣彦監督がこの花火をテーマにした映画「この空の花」を制作した。長岡花火は、当校の学区で打ち上げられており、子どもたちにとって大変身近であり、興味関心が高い。長岡花火についてのイメージを子どもたちの中で共有できるため、互いの長岡花火についてアドバイスし合える素地が整っている。

写真2　教師製作の作例

本題材では、花火を表現する方法として、直径6cm・8cm・10cmの発泡スチロール球か発泡スチロール板を自分の好きな形に切って使うものを、芯材として1つ選ぶ。そして、13.5cm・15cm・18cmの竹串、爪楊枝、割り箸、モールなどの線材を刺して、花火の形をつくる。更に、7色（赤・ピンク・オレンジ・白・黄緑・黄色・緑）の蛍光塗料を線材や芯材に塗り、ブラックライトに当てる。すると、暗闇の中で自分だけの長岡花火が光り輝くのである。線材を芯材に刺して形に表すことや蛍光塗料を塗って色を表す活動自体は難しくないので、繰り返し試しながらつくり進めることができる。

藤澤英昭は、題材にとって欠くことのできない視点を5つ挙げている。その中で、①その題材は児童にとって意欲的に取り組める楽しさを提供しているか、③その題材は表現制

作の過程で、十分な試行錯誤を許すような柔軟性に富んでいるか、と定義している。※3

このことは、今回開発した本題材と密接に関連している。

(2) 本題材における手立て

(ア) 導入段階での作例を基に表現の可能性について考える話し合い

本題材のスタート時に、教師の作例を提示する。そして、作例を基に、使われている材料を使って、どんな花火がつくれそうか話し合う。このことにより、長岡花火の表現の可能性を理解し、「こんな花火がつくれそうだな」という見通しを持ってから、つくり始めることができる。ここで大切にしていることがある。それは「後出しをしないこと」である。何を使ってよいのか最初にはっきりと提示せずに、後から出しても「なんでそれを最初に出さなかったの」となりかねない。使ってよい材料という限られた中で考えるからこそ、材料の工夫が生まれるのだと思う。

(イ) 自分の長岡花火の光り方を確かめるためブラックライトに当てる場の設定

図工室隣の図工準備室を暗くして、ブラックライトのスタンドを置き「確かめコーナー」を設置する。図工室で製作している子どもたちは、自分の花火の光り方を確かめたい時には、隣の準備室にある「確かめコーナー」に行き、光り方を試しながらつくり進めることができる。このことにより光り方を繰り返し試しながらつくり進めることができる。

(ウ) 子どもの表現をよりよくするための教師の言葉がけ・問いかけ

どんな題材においても、教師による言葉がけ・問いかけが必要である。特に本題材においては、一旦形として表れた子どもに対して、よりよい表現を追求する方向性を示すための言葉がけ・問いかけが必要となってくる。本題材では特に一旦形として表れたとき、長岡花火に込めた思いが形としてどのように表れているか子どもに考えさせるような言葉がけ・問いかけが大切となる。

(エ) 長岡花火のよさや工夫について友だちと互いに鑑賞する場の設定

自分なりの長岡花火が一通りできた段階で、互いの長岡花火のよさや工夫について鑑賞する場を設定する。このことにより、表現のよさや工夫、改善点についてアドバイスし合う姿が期待できる。また、友だちのアドバイスを基に、自分の長岡花火のよさに改めて気付いたり、よりよくしようとつくり変えたりする姿が期待できる。

(オ) 完成した長岡花火を紹介する活動

長岡花火は、ブラックライトに当てないと光り方が分からない。完成した長岡花火を家庭に持ち帰っても、光り方は家族に伝わらない。そこで、自分で写真を撮り、その写真を貼付し、花火のよさや工夫について記述したパンフレットをつくり、家族に紹介する。また、休み時間に図工準備室を開放して全校のみんなに見てもらったり、子どもの作品を展示できる作品展を活用して地域にある美術館に展示したりして、進んで自分たちの長岡花火を紹介する。このことにより、つくり出す喜びをより一層味わうことができる。

(3) 題材のねらい

線材を組み合わせて表現を確かめながらつくり進める中で、蛍光塗料を塗った部分にブラックライトを当てたときの光り方を変えるには線材と芯材に使う発泡スチロールの組み合わせ方と色の付け方を工夫するとよいことに気付き、色や形を工夫しながら自分なりの長岡花火を立体的に表すことができる。

(4) 評価規準

【関心・意欲・態度】

線材と芯材を組み合わせたり色を付けたりしながら、自分なりの長岡花火にしようと意欲的に取り組んでいる。

【発想や構想の能力】

自分がイメージしてきた長岡花火にするために、線材と芯材の組み合わせ方や、塗る色や色の付け方を工夫している。

【創造的な技能】

自分なりの長岡花火にしようと、奥行きを考えながら立体的な形を表す。

【鑑賞の能力】

長岡花火のよさについて色や形の視点から

感じ取り、文章で表している。

(5) 学習指導要領との関連

第5学年及び第6学年　A　表現（1）イ「材料や場所などに進んでかかわり合い、それらを基に構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながらつくること」に関連している。

学習指導要領では、「空間の奥行きに気を配りながら材料を配置する、光が差し込む場所で光をとらえる材料を使うなどが考えられる。」と記述されている。※4

本題材は、学習指導要領にあるように空間の奥行きに気を配りながら材料を配置し、蛍光塗料を使って色を付けブラックライトを当てるという光をとらえる材料を活用している。このように、本題材は学習指導要領と密接に関連している。

3　研究の実際

題材名「光り輝け　大島っ子の長岡花火」5年40人で実施。全7時間

(1) 抽出児のA児について

直感的に作品をつくり進め、自分がイメージしたことを形として素早く表現することができるA児。しかし、一旦形として表れてくることで満足し、自分の表現を見つめ直したり新たにつくり変えたりすることは少ない。本研究では、教師の作例を基に表現の可能性について話し合うことで、自分なりの長岡花火の見通しを持つ。そして、長岡花火の光り方を確かめながらつくり進める。自分なりの長岡花火が一通りできた段階で、互いのよさや工夫について鑑賞する。このことにより、自分だけの長岡花火にしようと更につくり進めたり、新たなよさを見いだしたりするA児の姿を期待した。

(2) 作例を基に表現の可能性について話し合い、イメージを構想する

本題材の最初に、教師が作成した長岡花火の作例をブラックライトに照らして子どもたちに見せた（写真3）。「花火だ」「きれい」「どうやってつくっているの」「つくりたい」という声。子どもたちが製作する意欲を高めた様子が伺えた。A児に感想を聞くと「光る花火だった。材料は何を使っているか暗くて分からない」と答えた。「どんな材料でつくるのか知りたい」「立体的だったけど、どうやってつくっているのだろう」と発言が続いた。材料やつくり方に、子どもたちの関心が高まってきた。そこで、明るい場所で作例を見せると、「棒を刺していたのか」「真ん中は、発泡スチロールか」と、材料を理解し、つくり方への見通しを持った発言が出された（写真4）。

表現への可能性について子どもたちが考え始めてきたと考え、「この材料でどんな花火をつくれそうかな」と問いかけた。「でっかくて、きれいで、土星の形」「おもしろい形」「天地人という花火の形もできるのかな」と発言する子どもたち。そこで、工夫の仕方について尋ねると、「刺し方を変える」「色を竹串に塗る」「発泡スチロールにも塗る」という発言があった。つくりたい花火のイメージが具体化し、見通しが明確になってきたと判断し、全員で「材料の使い方を工夫して、自分が表したい長岡花火をつくろう」という追究問題を設定した。

「どんな花火にしたいのかな」とA児に尋ねると、「竹串の長さを変えて球の周りに刺しながらでっかい花火をつくる」と、芯材を指差しながら答えた。自分がつくりたい長岡花火のつくり方と出来上がりのイメージを構想することができたA児であった。

写真3　展示した作例

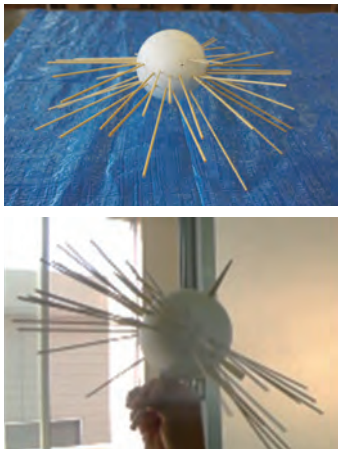

写真６・７　Ａ児の長岡花火

写真５　製作の様子

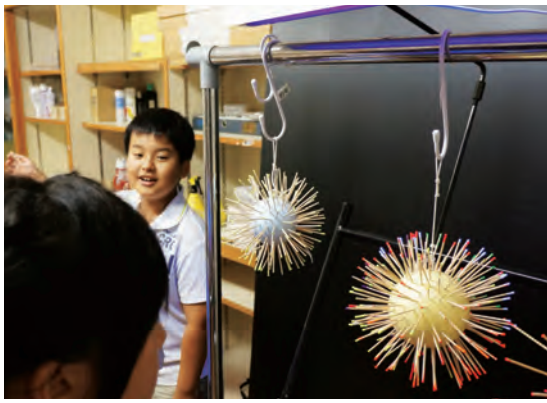

写真４　作例を見ている様子

（３）光り方を繰り返し試しながらつくり進める

Ａ児は、芯材の中で一番大きな直径10cmの発泡スチロール球を選んだ。次に、13.5cm、15cm、18cmの竹串と爪楊枝をそれぞれ５本程度と割り箸を２本、自分の場所に置いた。「どうして１種類ずつ選んだの」と尋ねると、「１種類ずつぐるぐる巻きにする」と芯材を指差しながら答えた。花火が大きく開いて光り輝くように表すＡ児の工夫の一つである。Ａ児はワークシートに右のように記述した。

・今日の授業で表現できたこと→（いろんな形）
・次の授業でしてみたいこと→（色塗り）

次の授業時間になると、Ａ児は、芯材の真ん中に割り箸を刺して貫通させた（写真７）。一旦形として表れてＡ児は満足していると捉えたわたしは「もうこれで完成なの」と問いかけた。Ａ児は「これでいい」と答えた。わたしは、まだ線材が何もついていない場所を指差しながら「ここはどうなの」と続けて問いかけた。Ａ児は、資料として置いてある『悠久山から見た正三尺玉』の写真を手に取り提示しながら「上の部分は上がりかけているところで、下の部分は一つ前ぐらいの様子になっている」と答えた。

Ａ児は、自分の席に着くとオレンジ色を花火に塗り始めた。Ａ児の様子を見ながら少し手の動きが止まってきた場面で、「どうしてオレンジ色にしたの」と問いかけた。すると、Ａ児は「先生がつくった花火のオレンジ色を見たら、火がついているように見えたから」と答えた。大きな花火が光り輝いて燃えている様子を、オレンジ色を塗ることによって表そうとしているＡ児であった。

しばらくすると、Ａ児は色塗りを止めて「確かめコーナー」に行き光り方を確かめた後に、わたしの所に来た（写真８）。光り方を見てＡ児はどう思ったか確かめるため、「ブラックライトに照らして、どうだった」と問いかけた。「溶岩みたいだった」と答えたＡ児の表情は、不満足感が表れていた。Ａ児の不満足感を解消するアドバイスが必要な場面であると捉えた。そこで、Ａ児の作品と作例を見比べながら「もうちょっと点々（火花）が足りないんじゃない。先生のつくった花火は点々になっているよね。花火は、真ん中の球が爆発して飛び散った点々で光を表しているよね」とＡ児に言葉をかけた。すると、まだ線材を刺していない場所を指差しながら「じゃあ、ここら辺を」と、Ａ児は答えた。

そして、自分の席に戻ると、竹串の真ん中

の部分にオレンジ色を付けていた（写真９）。授業が終わりに近づくと、わたしの側に来て、「先生、花火の色がすごくきれいになったよ」と話した。授業の振り返りとしてワークシートに次のように記述した。

・今日の授業で表現できたこと→（色塗りがよくできた）
・表現できなかったこと→（光り方が足りない）

授業中の態度とワークシートの記述から、色塗りで表現したい花火に近づいたが、もっと光り輝かせたいと、A児は願っていると思えた。

次の授業時間。どんなふうにするのかA児に聞くと、「竹串を刺してみようと思う」と答えた。色を付けるのではなく、竹串を刺して火花を増やすことで奥行きを表す新たな表現方法であった。A児は、竹串を自分の席に持ってくると、オレンジ色を塗ってある場所の上に何本も竹串を刺した。次に、長岡花火を逆さにして、色が塗られていない場所に竹串を刺した。それから、新しく刺した竹串にオレンジ色を塗り、次に黄色と白を混ぜた色と黄緑色をところどころに塗った（写真10）。やがて、色塗り用に使っていた割り箸を机に置き、「やったー、完成だ」と言った（写真11）。A児は、自分なりの長岡花火にしようと光り方を確かめながらつくり進め長岡花火を完成させた。よりよい表現を追求したA児の姿が現れていた。自分なりの長岡花火が形として表れてくると、子どもたちから「お互いの長岡花火を見せ合いたい」という意見が出された。そこで、次の時間に互いの長岡花火を鑑賞することにした。

（4）長岡花火のよさや工夫について友だちと互いに鑑賞する

授業時間、最初に教師の作例を提示し、「これのよさってどんなところかな」と問いかけた。子どもたちから「カラフル」という発言があった。そこで「カラフルっていろいろな色だよね」と聞くと、「はい」という返事があった。そこで、もう一度作例を提示しながら、「どんなふうに色を塗っているかな」と問いかけると、「ばらばら」という声が上がった。ばらばらに塗ることでいろいろな色が見えるよさ、つまり「色の塗り方を工夫するよさ」という視点が明らかになった。

次に2つ目の教師の作例を提示した。「色は一色」という発言。「形はどうかな」と問いかけると、「刺す場所が違う」という発言が出た。「上に短いもの、下に長いものを使っているよね」と更に問いかけると、多くの子がうなずいた。ここで、材料を組み合わせる場所を考えながらつくるよさ、つまり「材料の使い方を工夫するよさ」という視点が明らかになった。

どのようにしてよさや工夫を見つければよいか見通しが持てたと捉え、「長岡花火が光る様子を鑑賞して、色や形のよさを見つけよう」を追究問題として設定し、鑑賞を始めた。

①友だちのよさを見つける鑑賞

まずは自分の班の友だちの長岡花火を鑑賞してから、他の班の長岡花火を鑑賞することにした。子どもたちは、暗闇の中、ハンディタイプのブラックライトを当てながら意欲的に鑑賞していた（写真12、13）。鑑賞中、わたしはA児と次のように会話した。

A「これ、すげえ～」
T「何がすごいと思ったの」
A「バランスがすごい」←作品全体の形への着目
T「何のバランス」
A「竹串を刺しているバランスがすごい」←

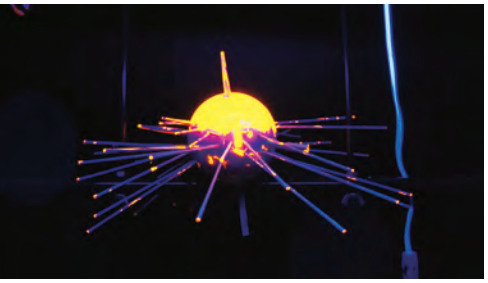
写真８　ブラックライトに当てた様子

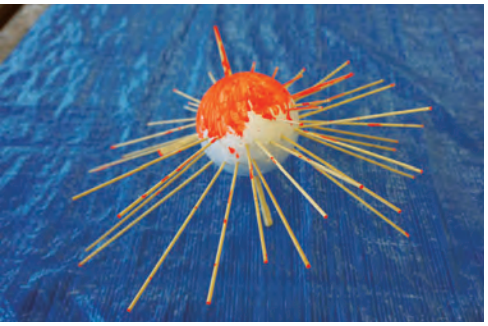
写真９　A児の長岡花火

写真 10　色を塗る様子

形を構成する材料の使い方のよさへの着目
T「モールの使い方はどう思った」
A「クルクルしている」
T「それは、どんなふうに見える」
A「モールが光っている。白いモールが特に光っている」↑材料の光り方への着目

2つの視点に着目しながら鑑賞することができたA児であった。

②友だちの意見を基に、自分の長岡花火のよさを考える

A児は、友だちの鑑賞カードに次のように記述した。

・色塗りに迫力があった。
・いろんな色を使っていてきれいだった。
・モールを上手に使っていた。

自分が試していない色の塗り方の工夫によって迫力が表現されることや、モールの使い方のよさに気付くことができたA児であった。

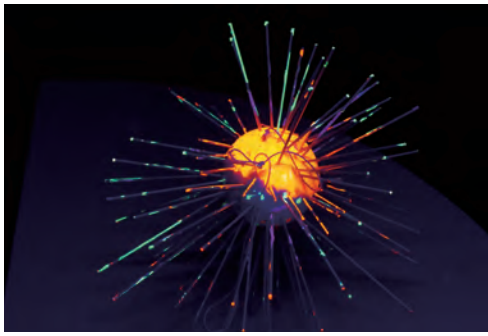

写真11　A児の長岡花火

次に、友だちがA児の作品を見てどんなことが書かれていたか聞いた。

よさや工夫	光り輝く作品を見て、よさや工夫を感じたところ
○	発泡スチロールにも色を塗っているところがいい
○	本当の爆発みたい
○	爆発した花火みたい
○	豪快に塗られて，案外きれい

A児は「爆発という言葉が多かった」と答えた。「どんなふうに思った」と問いかけると、「発泡スチロールにオレンジ色を塗ったから、その色が爆発しているように見えたと思う」と答えた（写真14）。更に「よかった？」と聞くと、「うん」と言って、満足そうにうなずいた。色をきれいに塗るよさだけでなく、花火が爆発している様子を表す新しい色のよさに気付くことができたA児であった。

写真12　鑑賞の様子

写真13　鑑賞の様子

鑑賞後「もう1回つくりたい」とB児が言った。B児は光り輝く長岡花火にしようと、蛍光塗料を混ぜて色を塗り、長岡花火を完成させた。すると、塗ったときには光り輝いていた長岡花火が、時間が経ってからブラックライトに当てると光り輝いて見えなくなった。そのため、B児の長岡花火を鑑賞した友だちには、光り輝くよさが伝わらなかった。そこで、今度は蛍光塗料を混ぜないようにして色を付け、自分なりの色に光り輝く長岡花火を完成させた。そして、全員の長岡花火が完成した。

(5) 家族にパンフレットをつくり紹介する

長岡花火は、ブラックライトに当てないと光り方が分からない。完成した長岡花火を家庭に持ち帰っても、光り方は家族に伝わらない。そこで、「写真を撮って、その写真と解説を記述したパンフレットをつくり、おうちの人に紹介してはどうか」と提案した。子どもたちが賛成したので、光り輝く様子を各自が写真に撮った（写真15）。A児は家族に花火を紹介する写真を撮り（写真16）次のよう

写真14　問いかけている様子

に紹介文を記述した。

ぼくの花火のよさはカラフルに塗ったところです。割り箸で塗ったら、棒にたくさん色を塗ることができました。上の方が少し光っている所を工夫しました。

この題材を通して、A児は一旦形に表すことだけで満足せずに、自分らしい長岡花火にしようと、花火の光り方を確かめ、繰り返し試しながらよりよい表現を追求した。そして、友だちの記述から花火が爆発しているように見える表現のよさに気付くことができた。

(6) 全校に長岡花火を紹介する

5年生がつくった長岡花火は、図工室横の廊下に置いておいた。すると、その姿を見て「ウニ?」という声。この物体は何なのか他の学年の子には分からなかった。そこで、5年生の子どもたちに「全校のみんなにもブラックライトに当てて、光り輝く長岡花火を見せよう」と提案すると、全員が賛成してくれた。そこで、5年生3クラス、各クラスから2点、合計6点を選び、昼休みに展示することにした。

展示場所となった図工準備室には、多くの子が見に来てくれた。見に来た人自身にブラックライトのスイッチを付けてもらい、光り輝く瞬間を体験してもらった。「きれい!」という声が何度も上がった。中には、「これで見るのは3回目だよ」と話す子や、一度見て、今度は友だちを誘ってもう一度見に来た子もいた。展示係の5年生も「たくさんの人が来てくれてよかった」と満足そうな表情で話していた。

(7) 地域にある美術館へ展示する

長岡市栃尾美術館では、毎年市内の小中学生の絵画作品や工作を展示する「ながおかのこども作品展」を開催している。せっかくつくった長岡花火を、他の学校の子どもたちや市民のみなさんにも見ていただこうと考え、作品展に展示できるか美術館に問い合わせてみた。

美術館の方から2階ロビーのスペースを使用できる許可をいただき、学年から代表6点を作品展に展示した。作品展は、2013年12月7日から2014年1月26日まで開催された。美術館の方からは来館された多くの方が長岡花火を見ていたと話をいただいた（写真20）。長岡花火を展示したC児は、展示された感想を次のようにワークシートに記述した。

作品展に展示されたのが初めてで、とてもうれしかったです。このおかげでもっと図工が好きになりました。

地域の美術館に自分たちがつくった長岡花火を展示して紹介することにより、より一層つくり出す喜びを味わったC児の気持ちが、感想から伝わってきた。

題材終了後にアンケートを行った。40人全員が（今回の題材は好き）と記述した。その理由として、（楽しさ）12人、（自分が思った花火ができたこと）6人、（色の工夫）11人、

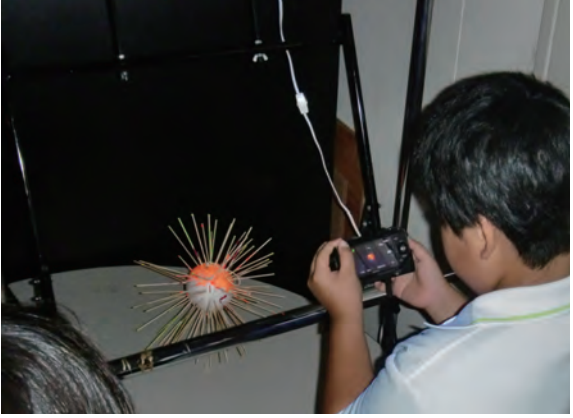

写真 15　写真を撮影する様子

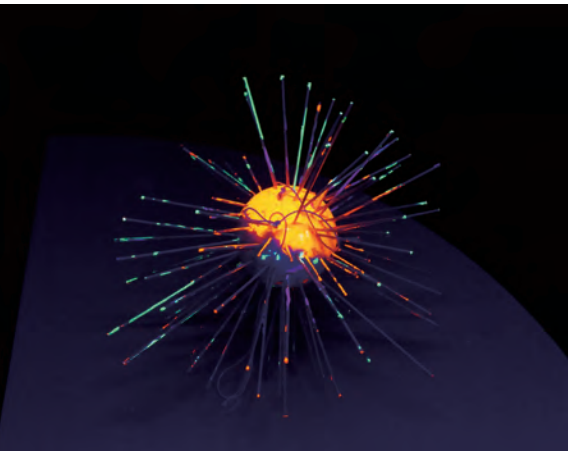

写真 16　A児が撮影した写真

写真 17　展示した長岡花火

写真 18　紹介している様子

写真19　長岡市栃尾美術館

写真20　作品展で展示している様子

（線材の使い方）6人、と記述していた。A児は、（本数を考えて、どこに刺すのか考えて、ものすごく考えることが多かった）という感想と、（デザインすることが楽しかった）と好きな理由を記述した。A児をはじめ多くの子どもが、つくり出す喜びを味わうことができたと考えられる。

4　成果と課題

（1）成果

（ア）導入段階での作例を基に表現の可能性について考える話し合いは有効

話し合うことによって、本物の長岡花火を参考にしながらも、使用する材料を活用しながら自分らしい長岡花火をつくり進めていくことができた。

（イ）長岡花火の光り方を確かめる場を活用するよさ

ブラックライトを当てて光り方を繰り返し確認しながらつくり進め、自分だけの長岡花火を完成させることによって、つくり出す喜びを味わうことができた。

（ウ）子どもの表現をよりよくするための教師の言葉がけ・問いかけの重要性

本題材では、一旦形として表れたA児に対して、よりよい表現を追求する方向性を示すための言葉がけ・問いかけを行った。このことによって、A児は、自分が表したい長岡花火にしようと試行錯誤しながらつくり進めることができた。

（エ）友だちと互いに鑑賞する場の設定の有効性

自分なりの長岡花火が一通りできた段階で、互いの長岡花火のよさや工夫について鑑賞することで、A児のように自分の作品のよさに改めて気付いたり、B児のようにつくり変えたりすることができた。

（オ）完成した長岡花火を紹介する活動によるつくり出す喜びの形成

自分の家族から始まり対象となる範囲を広げながら長岡花火を紹介することによって、つくり出す喜びをより一層味わうことができた。

（2）課題

（ア）事前に試す大切さ

蛍光塗料の活用に関する教材研究が不足していた。そのために、ブラックライトを当てた蛍光塗料の光り方の変化を事前に把握できず、自分が想像したような光り方を表現できないB児のような姿が現れた。色に関する表現の可能性について事前に試すことの大切さを痛感した。

（イ）よりよい表現にしようとつくり進める意欲を高める鑑賞の模索

鑑賞後に、よりよい表現にしようとつくり進めた子どもは40人中12人（30％）であった。つくり進めようと表現意欲を高める鑑賞の仕方が今後の課題である。

（ウ）新たな題材の開発

モールは色によって（白・ピンクなど）ブラックライトに当てると光って見える。例えば白いモールを組み合わせて白い妖精など想像上のものを作ったり、冬に咲く白い花などつくったりすることができる。また、長方形の発泡スチロールに線材を刺して生き物をつくったり橋や迷路などもつくったりすることができる。今回の材料を活用した新たな題材を開発していきたい。

注

1　「小学校学習指導要領解説　図画工作編」2008年　P44より

2　「言語活動の充実に関する指導事例集　小学校版」2011年　P5より

3　「図画工作でつく学力はこれだ！」―ひと目でわかる指導と実践のポイント―　開隆堂　2010年　P8より

4　「小学校学習指導要領解説　図画工作編」2008年　P47より

※本稿に関連した内容は、長岡市における「平成25年度教育研究論文」に発表しています。